

## 牛を愛する全ての人が誇りを持てるように

栃木県農業大学校 畜産経営学科 2年 糸川 夏海

私は、牛が大好きです。そして、祖父が営んでいた酪農という産業に誇りを持っています。私の幼い頃の夢は酪農家になること。体調を崩した祖父が酪農を辞めてしまった今でも、その思いはより大きくなり、夢から目標へと変わっています。キツイ・キタナイ・クサイ、3Kと言われる畜産の中で、更に他の畜種と比べると日々の作業が多く重い酪農を目指す上で、気になる言葉があります。それは、“ジェンダーギャップ”です。

この言葉がメディアで大きく取り上げられることが増え、様々な職業で問題視されていますが、畜産業もジェンダーギャップは無縁ではなく、むしろ大きく関係していると思うのです。なぜかと言うと、私自身、酪農を目指す上で、女性という立場に悩んだことがあるからです。以前の私は、「女性だからしようがない」と自分で割り切り、諦めてしまうことも多かったように思います。例えば、畜産業は様々な産業の中でも力仕事の多い産業ですが、男性が重い荷物を簡単に持ち上げられるのに、私は持てない。でもそれは、女性だからしようがないんだ、と。それを知っているながらも、「私は女性なんだから、できなくても当たり前」と心のどこかで思っていたように思います。

そんな私ですが、あるきっかけから、その思い・考えは大きく変わりました。それは高校3年生の時に、「未来の畜産女子プロジェクト」に参加したことです。このプロジェクトは、全国から集まった20人の農業高校に通う女子学生とニュージーランドで約2週間、生活を共にし、畜産について学ぶというものでした。もちろんニュージーランドの畜産業は、日本、特に私が生まれ育った千葉県のそれとは規模も仕組みも違い、見るもの全てが新鮮で、行ったこと自体がとても勉強になったのは言うまでもありません。

しかし私は、それ以上にニュージーランドの女性の意志の強さ、男性の、女性に対する大きな信頼に心を奪われました。ニュージーランドでは沢山の女性が畜産業に関わり、また経営者としてリーダーシップを取っていました。インタビューで話を聞いていると、「私は女性。でも、男性には負けているわけではない。それ以上に女性だからできることも沢山ある」という強い意志がとても伝わってきました。それに対して男性の言葉からも、「畜産業には女性が必要だ。女性がいて経営が成り立つ部分が多くある」と女性を深く信頼していることが、とても強く感じられました。そして、今までちょっとした力仕事は無理と諦めていた自分がとても恥ずかしくなりました。“牛が好き”という思いはこの女性と同じなのに「女性だからしようがない」と諦めていたのが、とても勿体ないことだと気づきました。

帰国後の私は、今までやっていなかった事にも積極的にチャレンジし、初めは重くて持てなかつたのに、持てるようになったものもあります。でも、どうしても動かせないものや

出来ないこともありました。そんな時は「私もやりたいから手伝って欲しい」と、声をかけられるようになり、そのうち一緒に作業していた男子たちも、女性だからと避けるのではなく「手伝うよ」「一緒にやろう」と声をかけてくれるようになりました。また、“工夫”をするように心がけました。どう頑張っても身体的な構造の違いはあるから、男性と同じような持ち方や動きではできない。ならば、持ち方を変えてみよう。ロープを使ってみよう。順番を変えてみよう。など、工夫をすればできることが分かり、1人でできるようになった作業もだんだん増えていきました。

しかし、そんなある日、とてもショッキングな出来事がありました。ある男性の畜産関係者に自分の将来の目標を話した時のこと、その方からかけられたのは「女だから経営者は無理。子どもを作るという女の仕事がある。女はこの産業に向いていない」という、とても冷たい言葉でした。ニュージーランドで見た、男性と女性が深く信頼し合い、共に畜産を営んでいる姿が、地球儀で見る距離以上に、とてもとても遠い存在に感じられました。この言葉を聞いた時、私は「でもこんな言葉には負けない。それ以上に、大好きな酪農をやりたいという思いの方が強いんだ」と自分に言い聞かせました。その一方で、「自分自身も変わらなくてはいけない。でも、男性の考えも変わらなくては、ニュージーランドのような、互いに深く信頼し合う関係は作れないんだ…」と言うことも痛感しました。同時に、私が感じたような、悔しいようなもどかしいような、複雑な思いをし続けている女性が少なくないのではないか?ならばそんな思いをしている女性を1人でも減らしたい、性別にとらわれず互いに支え合える環境をこの畜産でも作りたい、という新しい思いも湧いてきました。そのためには、女性も男性も互いに理解し合い、弱点を補い合うことが大切だと思いますが、私の周りでは女性が表に立つことに対する前向きな人があまり多くはありません。今でも農村地区では「女は結婚して半人前、子供を産んで一人前。」という人がいるとも聞きます。ですが、プラスに考えれば、自分とは違う、様々な見方をする人が自分の周りにたくさんいて、そういう人の意見を聞くことができるということでもあります。どうしたら畜産という分野で、女性が男性からの信頼を得てニュージーランドのような関係をつくることが出来るのかを考えると、まず、男性が女性のどのような部分を不安要素だと考えているのかを知ることが必要なのではないでしょうか。そして、それに対する解決策を女性同士で探し、還元し、男性も含めてより良いやり方を模索していく。その積み重ねが、お互いの強い信頼関係の構築に繋がるのだと思います。先日お会いした削蹄師さんからは、「今は畜産に関わる女性もたくさんいる。昔は男の仕事だった削蹄の世界も変わってきている」との言葉をいただきました。女性の進出や活躍をマイナスに捉える人もいるのは事実ですが、この削蹄師さんのような方が増えれば、少しづつでも前に進むことを実感しました。今はまだ落ち込むこともありますが、どこかで応援してくれている人がいる、前向きに考えてくれている人がいる。そう思えるだけで、自分も再び前を向くことが

できます。

私は自分の目標を達成するため、高校卒業後は、農業大学校に進学しました。現在は勉強・実習に励んでおり、あと何ヶ月後かには就職をして、念願の酪農業に飛び込む予定です。そこでも「女性だから…」とマイナスに思われるのでは無く、「女性でも！」とプラスに感じてもらえるよう、難しいかな？と感じたことでも諦めずまず工夫をすること、そして、必要な時には男性にサポートしてもらえるような仕事をしたいと思っています。いずれは、男女どちらかが他方をサポートするのではなく、自然と協力しあえるような関係性を築けること、良い意味で“女だてらに”と言われるくらいの、認められるような仕事をしたいと思っています。

私は自分のできることから少しづつ、畜産でのジェンダーギャップを埋めていきたい。いや、ジェンダーギャップという言葉自体が、畜産から無くなってしまうくらいのほうが、望ましいのかも知れません。

そしていつか、牛を愛する全ての人が年齢、性別に関係なく、誇りをもてる世の中になるように。

